

# 大学生と考える



2030年のその先を担うのは私たちが



# SDGs

2015年の採択から間もなく丸4年を迎える、持続可能な開発目標（SDGs）。進捗の実態を確かめるべく、大学生ら若い世代が、外務省やハイレベル政治フォーラム、国内の先進企業を訪問。SDGsのいまを見つめた。

# のいま

## 河野太郎外務大臣が、若い世代に期待することとは

日本政府におけるSDGs推進の代表的役割を果たしている外務省を訪ね、河野太郎外務大臣との対話に臨んだのは6人の大学生たち。日頃のSDGsの研究や活動を通して感じていることや疑問を大臣にぶつけ、率直な意見を交わした。

SDGs達成に向けて、自分たちが果たすべき役割とは——。今年7月に国連本部で開催されたハイレベル政治フォーラムにも参加した加戸菜々恵さん（ニューヨーク州立大学ビンガムトン校4年）と大貫萌子さん（慶應義塾大学2年）は、若い世代が声を上げることの重要性と同時に、その声を意思決定の場に届けることの難しさもあらためて感じたという。「皆さんは生まれた時からインターネットがある、いわばデジタル・ネイティブ世代でしょう。海外の人と接したり連帯したりすることに、心理的な抵抗も技術的な壁もないはず。そういう若い世代が媒介となって影響力を及ぼすことは、今後様々な局面で増えると思います。その際、少なくとも英語は不自由なく使いこなせること、さらにできればもう1か国語をきっちり身につけてほしいと思います。簡単なことじゃないけどね（笑）」と河野大臣。

海外インターンシップを運営する団体で活動しながら経営学を学ぶ大橋彩香さん（明治大学4年）は「今後、より多くの日本の企業を巻き込んでいくために大切なことは何でしょうか？」と質問。「まず、企業にとってSDGsの活動が“CSRの一環”ではなく、“本業”を通じた取り組みであることが重要です。さらに大企業のみならず、中小企業も積極的に関与してもらうこと。そのために、いま外務省では日本青年会議所と協力し、全国津々浦々の企業にSDGsを浸透させるための活動を始めているんですよ」と解説してくれた。また、SDGsや平和構築の授業で法の重要性をあらためて認識したという丹羽尚美さん（上智大学3年）には、「国際社会で活躍できる弁護士が日本には圧倒的に少ない。そんな志を持つ人がこれからもっと出てくれば」と期待を寄せた。

卒業後は地元・滋賀の企業で働きながら自ら立ち上げた会社でSDGsの発信に取り組むという戸簾隼人さん（立命館大学4年）、精神障がいのある人のアクセシビリティに関する研究を通してSDGsに貢献したいという飯山智史さん（東京大学4年）のように、今後も精力的に活動を続けていく学生も。「それは頼もしいね」と大臣もにっこり。「SDGsの『誰一

人取り残さない』という理念は、その達成に向けて『誰にでもできることがある』ということでもあります。社会的な立場、住む場所、金銭的な事情と、制約は様々あるでしょうが、その中で最大限できることは何かを考え、それを実行するための力を身につけてほしい。そしてぜひ皆さんの熱を周りに伝えて、共に取り組む仲間を増やしていきましょう」

あたたかな激励に、「地域に軸足を置いて活動することが、いまの自分の役割だと覚悟が決まりました」（戸簾さん）、「若者なりの視点や感覚は強みになると言っていただけでうれしかった」（飯山さん）などの感想も。河野大臣との対話が、それぞれのやり方で挑戦を続ける学生たちの大きな励みとなったようだ。



（写真右から）加戸菜々恵さん（ニューヨーク州立大学ビンガムトン校）、大貫萌子さん（慶應義塾大学）、河野太郎外務大臣、戸簾隼人さん（立命館大学）、大橋彩香さん（明治大学）、飯山智史さん（東京大学）、丹羽尚美さん（上智大学）

# High-level Political Forum

ハイレベル政治フォーラム  
[現地報告]2019/7/9-18

# 世界は未来を

## Students' EYES

**加戸葉々恵さん** (ニューヨーク州立大学ビンガムトン校4年)  
 ゴール4「質の高い教育」については、アイデア出しや意見表明にとどまらず、「実際に行動する。社会にリターンをもたらす」ための教育が注目され、議論されていた。「どんなに良いスピーチよりも実行を」——今回のHLPFでのアントニオ国連事務総長の言葉だ。私たち若者から声を上げ実行に移していきたい。

**林 研吾さん** (慶應義塾大学4年)  
 国際協力は「先進国から途上国への支援」であるとされていたが、「南南協力」のように「途上国から途上国への支援」もまたSDGs達成のためには必要だと気付かされた。日本はSDGs達成に向けて先頭に立つべきだし、それができる。卒業後は国際協力の仕事に就くので、今回の経験を生かして世界に貢献していきたい。

**大久保勝仁さん** (JYPS参画部統括)  
 自発的国別レビュー(VNR)の仕方を考えるサテライトイベントでは、「国内のSDGs実施の効果測定を適切に行うには」「VNRの良フォーマットを作ろう」などの議論が交わされ、加盟国同士のピアレビューの必要性がしっかりと認識されるように感じた。現地でも協働関係を築き生かすには、準備が重要だと再認識した。

**清水 瞳さん** (慶應義塾大学大学院1年)  
 Local2030のサテライトイベントの際「ローカルレベルの活動が積み重なり、グローバルレベルへの貢献になる」というメッセージが印象的だった。自分のコミュニティをよりよきようにと奮闘することの尊厳、また、住民巻き込み型の政策や活動がSDGs達成につながることを実感した。

**トラビンはなさん** (慶應義塾大学2年)  
 印象深かったテーマは、難民問題をはじめとする人間の安全保障について。「人が人をどう扱うか」という問題でもあると思う。我々若い世代は、まず選挙に参加する。国際問題や世界の現状を把握することから始めなくては。日本人として、日本が世界にどう影響を与えているかを意識すべきだと思う。



## 日本の企業・自治体は、国際的な論議に積極的な関与を

7月のハイレベル政治フォーラムでは、民間や国際機関、地方自治体といった国以外のステークホルダーが非常に活発に議論をしていたのが印象的でした。特に、様々な国から集った地方自治体が活動内容を自主的に情報交換する「自発的ローカルレビュー(VLR)」を開いたのには感心しました。これは従来の国別の報告「自発的国別レビュー(VNR)」に準えて行われたもの。日本の自治体は、他国と比較してもSDGsへの関心の高さ、取り組みには目を見張るものがありますから、今後は日本の自治体もぜひこうした場所で積極的に発表したり、連携する仲間と出会う機会があればと思います。

自治体のみならず、企業の姿勢も重要です。これからは、「国内で優良事例をつくる」ことに加え「国際的な論議に積極的に入っていく」ことが求められます。例えば、い国連開発計画(UNDP)は、SDGsに取り組む企業を認定する仕組みを考えていますが、その基準を決定する議論の場に、日本企業の姿は残念ながらありません。すべての国が目指すSDGsがこれからの「成長戦略」の指針となることは間違いありません。日本企業が今後、SDGsの世界基準づくりを牽引していくことを期待しています。

SDGsの採択から4年が経ちますが、当初から2019年まではスタートアップの期間と考えられてきました。その観点からすれば、ここまでの滑り出しは上々といえるでしょう。日本国内でも、色んな優良事例やその「種」ができ始めています。2030年に向けて、そうした事例を増やし、かつスケールアップしていければ、SDGs達成に向けて希望が持てるのではないのでしょうか。(談)



**Surprising Ceramics.**

人と自然とすべての生き物がいつまでも響きあう世界を目指して。創立から100年。日本ガイシは常に時代に合わせて、技術を磨き上げてきました。すべての技術は、次の世代の未来のために。セラミックスの無限の可能性とともに。

**日本ガイシ** NGK

日本ガイシ × ポケモン スペシャルムービー公開中！  
 美しい自然環境に住み、人間と共生するポケモンとのコラボレーションを通して日本ガイシの技術が変える世界を描きます。 <https://www.ngk-global.com/sc/jp/>

©NGK・kero/dwarf ©1995-2019 Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK Inc. ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリエーターズ・ゲームフリークの登録商標です。

# あきらめない

7月9～18日、ニューヨーク国連本部で開催されたハイレベル政治フォーラム(HLPF)。毎年、政府と官民のリーダーらが出席し、SDGsの進捗を把握するとともに、課題や成功例について議論する貴重な場となっている。今回は、政府公認のユース代表団としてJYPSのメンバーが参画。さらに、慶應義塾大学・歴史憲史研究の学生がサイドイベント等にオブザーバーとして参加した。SDGs達成に向けた見通しは。そして、若者の目に世界のいまはどう映ったか。

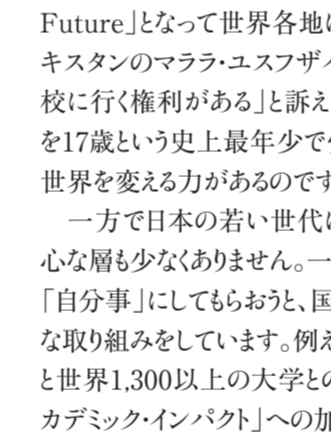


## 若者には世界を変える力がある。構想力と行動力に期待

今回のハイレベル政治フォーラムに、日本の若い世代の参加があったことをうれしく思います。若者は、未来のリーダーであると同時に、すでに今日を生きるリーダーです。スウェーデンの少女、グレッタ・トゥーンベリさんは「子どもたちの将来を奪わないで」と15歳の時に気候変動の危機を訴える座り込みを始めました。その活動は「Fridays for Future」となって世界各地に広がっています。また、パキスタンのマララ・ユスフザインさんは「女の子だって学校に行く権利がある」と訴え続けて、ノーベル平和賞を17歳という史上最年少で受賞しました。若者にこそ、世界を変える力があるのです。

一方で日本の若い世代には、世界の課題に無関心な層も少なくありません。一人でも多くの人にSDGsを「自分事」にしてもらおうと、国連広報センターでも様々な取り組みをしています。例えば大学に対しては、国連と世界1,300以上の大学との連携の枠組み「国連アカデミック・インパクト」への加盟を働きかけています。さらに、より気軽な活動の場として、食品ロス削減レシピや食事で環境負荷を下げる工夫などを共有する「フードチャレンジ」、不要になった洋服をアップサイクルする「ファッションチャレンジ」といったキャンペーンも立ち上げています。

SDGsは極めて野心的な目標であり、あらゆるアクターが全力を尽くさなければ到達できません。しかも近年は、貧困削減のペースの遅れ、気候変動の加速など、より一層の規模とスピード感で取り組まなければ達成が難しいという現状も浮き彫りになっています。世界レベルで課題を考え、日頃のアクションに結びつける。そんな構想力と行動力のある若者に大いに期待しています。(談)



**岩田寿夫さん** (慶應義塾大学大学院1年)  
 期間中は、会議室だけでなく(カフェテリアや廊下でも様々なセクターの人が話し込んでおり、パートナーシップの重要性を肌で感じた。また、「インディケーター(指標)」というワードが頻りに使われており、SDGsの達成に向けて、いよいよ具体的な成果を意識して取り組まなければならない時期が来たのだと実感した。

**井上ゆかりさん** (ニューヨーク州立大学ビンガムトン校3年)  
 「モバイル銀行を活用することで発展途上国の女性の金銭面での自立を促す」といった、技術イノベーションとジェンダー問題の関連性が興味深かった。技術の発展は、国・地方の格差、ジェンダー格差を小さくするのだと知った。より多くの若者が政治や国際協力の活動に参加するよう、きっかけ作りをしていきたい。

**遠藤舞依さん** (創価女子短期大学2年)  
 今回のレビュー対象でもあった気候変動は、環境問題の一つであるだけでなく、難民が増えたり教育のアクセスが落ちたりと、新たな問題を引き起こす。解決には個人の力が重要であるのにも関わらず、例えば日中韓で気候変動対策に取り組むなど、国家間の協力体制を作ることができれば素晴らしいと思う。

**高橋慶多さん** (慶應義塾大学3年)  
 各分野の課題を包括的に考えられる点がSDGsの魅力だが、ゴール同士、ターゲット同士がどのような関わりを持っているのか、定量的に示すことは非常に難しい。大学でゼミでも感じていたことが現地であらためて実感した。今後、インターナレッジを明確にすることが、SDGsが効果を発揮するための課題になるのでは。

**大貫萌子さん** (慶應義塾大学2年)  
 SDGsは「全会一致で採択された」と頭では分かっていたものの、実際に世界中の人が同じ目標に向かって取り組むことがいかに素晴らしいかを再認識した。ちなみに国連ではベクトルがすでに使用されており、ウォーターサーバーや紙パックを使っていた。日本でもアクションを起こさないと考え始めている。

**CO<sub>2</sub>を排出しない。大型水素ガスタービン発電**

MHPSの大型水素ガスタービン発電が、地球の明日をきっと明るく照らします。

**Power for a Brighter Future**

〒220-8401 横浜市西区みなとみらい3-3-1 三菱日立パワーシステムズ株式会社 [www.mhps.com/jp/](http://www.mhps.com/jp/)

**MHPS** Mitsubishi Hitachi Power Systems

# COMPANY VISIT

SDGs先進企業を訪ねて

Case of 日本航空株式会社

# 2030年、世界の空に バイオジェット燃料を



1 JAL国内線に9月から導入されるエアバスA350は、軽量化により燃費が大きく向上。機体を日本に運ぶ際にはバイオジェット燃料が使用された  
2 衣料品の綿からバイオジェット燃料を生成する過程をミュージアムで紹介  
3 空港内のオフィスは学生たちにとってすべてが新鮮

世界をつなぐグローバル企業として、地球温暖化の主要因といわれる二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の排出抑制に早くから取り組んできた日本航空(JAL)。同社が次世代の、これまで以上に抜本的なCO<sub>2</sub>排出量抑制の取り組みとして注力しているのが、「バイオジェット燃料」の利用促進だ。このプロジェクトの意義と進捗について聞かため、航空業界の仕事やエネルギーのサステナビリティに関心の高い学生たちが同社を訪れた。

ブランド・コミュニケーション担当の松尾知子さんと、調達本部燃料グループの平野佳さんに格納庫やJAL SKY MUSEUMを案内してもらった3人。「バイオジェット燃料は、都市ゴミなど地球上で一旦

利用したものや成長過程でCO<sub>2</sub>を吸収したのからつくられます。新たなCO<sub>2</sub>発生源となる原油を採掘しないので、現在使用している燃料と比べて地球上のCO<sub>2</sub>排出量が抑制されます」

解説を聞いたのち、それぞれが関心のあるテーマを質問していく。「バイオジェット燃料の利用がかえって森林伐採につながることはないですか」(明治大学・樋山輝さん)。「その懸念は確かにあるので、原料までさかのぼって調べるなど、常にサステナビリティの観点をもって調達しています」。「燃料の製造施設をJALが自前で持つ予定もありますか」(中央大学・杉山麻子さん)。「そのような選択肢も含めて、早期に実用化していくためには、どんな方法が一番良いかを考

えながら取り組むことが大切だと考えています」。「他社との連携を進めることが、バイオジェット燃料実用化の鍵を握るのではないですか」(今秋から航空大学校に進学予定・帆士大貴さん)。「重要な鍵だと私たちも思います。多くの人と協力しながら、つくって・買って・使うという流れを確立することが必要です」。明快に答えるふたりの言葉に、どんどん引き込まれていく学生たち。

「私たちは、ユーザーとしてバイオジェット燃料実用化への取り組みの『意志』を明確に示し、様々な業界との連携を積極的に行なっていくことが大切と考えています」。平野さんの言葉に、その場の誰もが深くうなずいた。

**JAPAN AIRLINES**

## バイオジェット燃料で 飛行機が飛ぶミライ

**SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS**

2030年以降に世界が達成すべき目標

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

13 気候変動に具体的な対策を

**JALだからこそできるSDGs**

都市ゴミなどを原料とする燃料で飛行機が飛ぶ——。そんな循環型社会を実現すべく、JALグループでは「バイオジェット燃料」の利用促進に取り組んでいます。CO<sub>2</sub>排出量を削減し、温暖化に対策を。豊かな地球を次世代に引き継ぐため、私たちの挑戦は続きます。

明日の空へ、日本の翼

## Students'EYES

樋山輝さん(明治大学4年)

もも自分が旅行に行き、「この飛行機は都市ゴミからつくった燃料で飛んでいます」なんて聞いたらきっとワクワクすると思います(笑)。選べるのなら選んで乗りたいぐらいです。バイオジェット燃料はまだコストが高いようですが、サステナビリティに貢献するのなら自分の負担が多少増えてもいいと考える人はいるはず。いろんな選択肢が増えてほしいと思いました。



帆士大貴さん(航空大学校入学予定)

この秋から僕は航空大学校でパイロットをめざします。運航方式等により、燃料の使用を減らしCO<sub>2</sub>の排出を抑えられると知り、パイロットの責任は大きいのだとあらためて感じました。バイオジェット燃料は、なるべく早く本格的な利用が広がってほしいと思います。そのためには航空会社だけでなく、多くの人を巻き込んでいくロードマップが必要ではないかと感じました。



杉山麻子さん(中央大学3年)

私はジャーナリズムを専攻しているので、今回の訪問ではJALという企業の姿勢や考え方をすることもひとつの目的でした。フライト中のCO<sub>2</sub>排出を減らすため、飛行機に積み込む食器ひとつまで軽量化に取り組み、省エネに努めているという話にはとても驚きました。まだハードルが高いというバイオジェット燃料100%のフライトも、JALならいつか実現してくれる気がします。



## Staffs'EYES



松尾知子さん(日本航空株式会社 コミュニケーション本部)

私たちJALは、2009年にカメナという植物を主原料にした燃料でのフライトに世界で初めて成功し、その後はシカゴ・サンフランシスコから日本までのバイオジェット燃料飛行も実現しました。現在は、全国から集めた衣料品の綿を原料に、バイオジェット燃料をつくりチャーターフライトを実施するプロジェクトが進行中です。2020年中の実現を目指しています。



平野佳さん(日本航空株式会社 調達本部)

バイオジェット燃料は欧米で先進的に製造が開始された段階です。現在使用している燃料と同じように製造・使用されるようになる将来を見据えて、原料調達やコストなどの課題を解決していくために、業界を超えた連携を行なうことが不可欠だと考えています。リーディングエアラインとして先頭を切ってバイオジェット燃料の実用化を進めることで、環境負荷低減に貢献していきたいと思っています。



自然には  
つukれない  
未来がある。

自然は偉大だ。けれど自然だけでは、できないこともある。私たち昭和電工は、もっと世界に驚きや感動を届けるために生まれ変わります。これまで以上に、みなさまの声に深く耳を傾け、技術を磨き上げることで「こころ」動かす製品やサービスを、「社会」をより良い方向へ動かすソリューションを提供します。化学の可能性は無限だ。その可能性をひとつでも多く実現していく。そのために、まず私たちが自分自身を動かし、一歩を踏み出します。こころを、社会を、動かす。新しい昭和電工の舞台の幕開けに、ご期待ください。

SHOWA DENKO 昭和電工

# YOUTH CHALLENGE

学生の取り組み

Case of 立命館大学

# 見えない未来を信じる その力が明日を変える

2030年にめざす学園ビジョン「R2030」に向けた「チャレンジ・アクション」として、学生・生徒・児童から教職員までが一体となりSDGsを推進することを宣言した立命館学園。学内でSDGs啓発イベントを企画・実行するなど独自の視点とアイデアでSDGsと関わる3人の若者が、「SDGsとは未来を信じる」と語る企業家の洪澤健氏のもとを訪ねた。



(写真左から) 洪澤健さん(コモンズ投信株式会社取締役会長)、上田隼也さん(立命館大学校友)、小川玲香さん(立命館大学3年)、佐藤大修さん(立命館慶祥高校3年)

## 新しいエコシステムとしてのSDGs

未来を見据えた長期的な資産づくりをサポートする「コモンズ投信株式会社」取締役会長の傍ら、社会起業家の育成・支援にも精力的に取り組む洪澤氏。朝日新聞クラウドファンディングサイト「A-port」では、SDGsの目標達成に貢献する人や団体の推薦人も務めている。

そんな洪澤氏との対話が念願だったという立命館大学校友(卒業生)の上田隼也さんは、現在も続く学生主催のSDGs体験型イベント「Sustainable Week」の発案者だ。「SDGsの理念である社会をトランスフォーム(変革)する力とはどのようなもので、そこではなぜ企業や個人の力が重要なのですか」。上田さんのそんな質問に、洪澤氏はふたつのポイントを挙げた。「誰ひとり取り残さない世界」

という途方もない目標を実現するには、現状からの大きな飛躍が必要なこと。そして、SDGsとは新しいエコシステム(生態系)をつくらうとする取り組みであること。「一見どう作用しているのかわからないようなものがあったらいい。多くの人や団体が多様なアクションを起こすことで、飛躍の可能性が高まり、生態系が豊かになります」

## Z世代こそ2030年の主役

映像学部3年生の小川玲香さんは、感動や楽しさを多くの人と共有することで社会課題を解決したいと考えている。しかし数値で効果が測れるものではないアートやエンタメの力が本当に課題解決につながるのか、不安になることもあるという。洪澤氏は「できる・できない」という軸と、「やりたい・やりたくない」というふたつの軸を思い浮かべてほしいと語っ

た。「私たちの夢や目標は、往々にして『やりたいけどできない』という場所に留まっています。お金・時間・経験・人脈がないからできない。でも経験を積みばいつか人脈ができ、お金や時間ももっと使えるようになるかもしれない。大切なのは、せつかく状況が『できる』になったとき、夢を『やりたくない』に変化させないこと。小川さんにとって本当にやりたいことなら、それは続けるべきだと思います」

立命館慶祥高校3年生の佐藤大修さんは、学校祭で仲間とともに「SDGs×Rits 高校生の考える未来」と題するイベントを実施した。「それぞれが実現したい目標について発表しました。僕自身の夢は、途上国などで過酷な状況にある子どもたちに教育を届けるプロジェクト。でもまだ高校生の僕たちは、いま何から始めればいいのか」。そんな問いかけに洪澤氏が答える。「プロ野球の栗山英樹監督の著書に、『見えない未来を信じる』という言葉がありました。私の言葉でいえば、それは未来への投資です。今日よりも良い明日があると信じるからこそ、人は行動を起こす。環境の破滅や人口減による社会の衰退など、見えている悪い未来が現実になってしまわないよう、みなさんには見えない未来を信じる力が必要です」

対話の終わり、将来への希望と不安の両方を持ちながら自らの意志で行動する若者たちに、洪澤氏はこんなエールを送った。「Z世代と呼ばれるみなさんは、日本では少数派ですが世界に目を広げれば人口の非常に多い世代です。2030年はみなさんの時代、大いに期待しています」



## 立命館大学 SDGsへの取り組み

### 立命館SDGs推進本部が発足



立命館学園では2019年4月に「SDGs推進本部」を発足。世界に共通する課題に向き合い、世界とつながりチャレンジする学園を目指し、多様な個人や組織をつなぎ、新たな「知」の創造とそれを担う「人材」を育成している。学生・生徒・児童・教職員から主体的に展開されるチャレンジを学園がSDGsと位置付け支援するという形が特徴。今後も推進本部がハブとなり、全学を巻き込みSDGsを推進していく予定だ。

[www.ritsumeai.ac.jp/sdgs/](http://www.ritsumeai.ac.jp/sdgs/)

「教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する」ことを使命とする立命館学園は、これまで学園内で個々に展開されてきた社会課題解決に資する取り組みをSDGsの枠組みで再評価。学園として積極的に支援する体制を整えている。ここではその取り組みの一部を紹介する。



## SUSTAINABLE WEEK

SUSTAINABLE WEEK SUPPORTS SDGs.



**【ビジョン】**  
大学を核として、周辺地域を巻き込む増殖型SDGsエコシステムを創造する



**【ミッション】**  
学生同士が連携し、社会とつながりながら、主体的に課題解決に取り組む、次世代のSDGsリーダーになる



**【バリュー】**  
学生が持続可能について深く考え、自己表現できるサステイナブルキャンパスを実現し、そこから社会解決に向けた提言を行う

立命館大学びわこくさつキャンパスを「小さな地球」と見立て、SDGsにおける17のゴールに学生団体が主体的に取り組む。「宗教の違いを超えて食べることができるSDGsカレーの開発」などユニークな企画も多く、幅広い層が参加しやすい。なお今年は11月下旬から12月初旬にかけて「Sustainable Week 2019」の実施が予定されている。

### 人々は紙ストローにいくら払える？



経済学部・寺脇拓ゼミでは、今年度研究テーマのひとつとして「人々が紙ストローに支払ってもよいと思う金額(支払意思額)」を計測。同時に紙ストローの強度が改善された場合にその評価が大きく向上することを調べ、代替ストローについて可能性を考えている。

### 現場に赴き、国連とSDGsを理解する

海外スタディ「ニューヨークで学ぶ国際連合」は、米国・ベース大学を派遣先とする留学プログラム。国連本部への訪問や専門家の講義、模擬国連などを通して国連の機能と役割、現在の国際情勢などについて学ぶ。国内での事前・事後学習も充実しており、アカデミックイングリッシュのほか英語を用いた調査・交渉のスキルなど、将来に役立つ高い「英語運用能力」が身につく。



## 【つくる責任】マニフレックスは約束します。

枕やマットレスの芯材にプラスチックを使いません。

金属製スプリング・バネを使いません。

廃棄の際、それらは海や大地や自然環境に大きな負荷をかけるから。

だからこそ、あなたも【つかう責任】についてちょっとだけ考えてみて下さい。

寝具はたびたび買い変えるものではないのですから。

## マニフレックスは 持続可能な社会の実現を目指します。

### 身体と地球に優しい寝具。



人気沸騰の最新マニフレックス  
“オクラホマ” **NEW**

総厚 23 cm の圧倒的なボリューム。  
ソフト(表)とハード(裏)二通りの寝心地が選べる機能性。  
光沢感溢れる高級エコ素材ヴィスコース側地採用。

(S) 58,000円+税〜  
12年長期保証

**magniflex**  
マニフレックス

表参道ショールーム ☎ 0120-008-604 大阪ショールーム ☎ 0120-028-008  
西宮ショールーム ☎ 0120-554-149 宮崎ショールーム ☎ 0120-001-464 名古屋ショールーム ☎ 0800-2000-704  
取扱店・東急ハンズ主要店・ロフト インテリア扱い店・全国有力寝具専門店・イオン 寝具取り扱い店  
株式会社フラグサポート 東京都港区北青山 3-5-5 [www.magniflex.jp](http://www.magniflex.jp) マニフレックス 検索





# NEVER WALK ALONE. 共に、 歩む。



地球から17の宿題が出された。  
貧困をなくそう、人類平等、海を綺麗に、、、etc.  
正直、どこかで見たことある宿題ばかりだ。  
これはつまり、「いよいよマズイよ」  
「このままでは地球はもたないぞ」という警鐘でもある。

大和証券グループは、金融、テクノロジー、地方、ライフ  
4つの得意領域をフル稼働させ、立ち向かう。17もある宿題は、到底1人では解けない。  
それぞれに、助けを必要としている人もいるだろう。

人類は、いよいよ人生100年時代に突入した。  
SDGsの達成目標である2030年は、遙か先の未来ではなく、  
愛する家族が普通に暮らすであろう日常だ。

だからこそ、共に、歩みたい。  
17の宿題を、共に考え、共に助け合い、共に解き、共に喜ぶたい。

NEVER WALK ALONE.  
共に、歩む。